

## ニセコ町自治創生推進本部の検討状況

### <本資料の位置づけ>

- ✓ ニセコ町自治創生推進本部（役場メンバーの推進組織）では、同本部プロジェクトチームのヒアリングで得られた役場職員のコメントを結集して、まち・ひと・しごと創生総合戦略（平成 26 年 12 月閣議決定）（以下「国総合戦略」という。）における基本目標に沿って検討状況を整理した。
- ✓ 今後、ニセコ町自治創生協議会や町民講座の議論などの参考資料に、現時点の役場のアイデア集（たたき台）として定性的に示すことを念頭に置いている。

### ※国総合戦略（平成 26 年 12 月閣議決定）における基本目標

- ① 地方における安定した雇用を創出する
- ② 地方への新しいひとの流れをつくる
- ③ 若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる
- ④ 時代に合った地域をつくり、安心な暮らしを守るとともに、地域と地域を連携する

### 全般的なコメント

#### （自治創生の目的）

- 自治創生や地方創生という言葉そのものが分かりにくい。ニセコ町には魅力が多く、共通のベクトルを絞り込むのは苦勞するかも知れないが、まず、ニセコ町が自治創生の取組によって実現したい将来像を明確化して、町全体のベクトルを合わせるべき。

#### （自治創生の前提条件）

- 現在、ニセコ町では子どもが増えている傾向がみられる。そうした実態について人口推計でどの程度加味するかは、自治創生に限らず、今後の町の取組の検討に当たっても大きく影響する。
- 人口減少は全国的な傾向であり、ニセコ町単独で人口増加を目指すような目標設定は現実的ではない。ニセコ地域を広域的に捉え、東京や札幌から人口が流入することを考えるべき。
- そもそも、本社機能や中央省庁が東京に集中しており、道内に大手企業がないという構造的な問題がある。市町村単独で東京一極集中や人口減少の流れを止めるのは現実的に難しい。

- 人口 5,000 人の規模が自治体として適当なのか。周辺自治体との合併を含めて、広域的な連携のあり方も考えるべきではないか。
- まずは、ニセコのブランド力の向上が必要。ニセコ自身が思っている以上に、ニセコの名は対外的に知られていないのではないか。情報発信をさらに充実すべき。

#### （役場のアプローチ）

- 役場職員は、既存業務を数多く抱えている。そのような中、役場職員が当事者意識をもって自治創生の取組についても新たに拡げていくのは、現実的には困難。人口減少などに対する危機感や必要性を共有するだけでなく、自治創生の議論を踏まえた既存事業のスクラップアンドビルドについても積極的に進めるべき。
- 第5次ニセコ町総合計画の評価と連携して検討を進めるべき。
- 町内の資産管理を体系的に行うべき。住宅、農地、光回線、上下水道などのインフラを共通の地図に落とし込むことで、土地利用やまちづくりをより有効に検討することができる。
- 役場主導による取組は長続きしない。町全体を巻き込む検討・取組が重要。
- 民間の経済活動に、行政としてどの程度まで関与すべきかが分からない。
- これまでの歴史・反省を踏まえた総合戦略を検討すべき。例えば、じゃがいも焼酎、牛乳酒、地ビール、トマトジュースなどに取り組んだことがある。

#### （フォローアップ）

- KPI 設定や PDCA サイクルに当たり、即効性がない取組や数値評価が馴染まない取組が潰れないように留意すべき。短期的に失敗をしても、長期的に必要な取組は前進させるという観点も大事。

#### 【対応の方向性】

1. 自治創生の検討には、客観的データに基づくニセコ町の強み・弱みを踏まえた重点化という判断の要素がある。人口推計及びそれによる影響を分析・議論していく中で、ニセコ町が総体的に目指すべき将来像についても検討する。
2. 人口推計は、ニセコ町に将来起こりうる影響について町民全体で広く議論できるよう、幅のある複数のシナリオを提示する。
3. ニセコ町単独に限らず、ニセコ地域全体で目指すべき方向性についても、議論の対象となりうる。

## 基本目標① 地方における安定した雇用を創出する

### (1) 全般

#### (現状・課題)

- 通年雇用が少ないのが課題。ニセコ町の基幹産業である観光・農業とも、季節的な一時雇用が多く、不安定・低収入。月単位で見ると、仕事がない期間が生じてしまうケースすらある。
- 住宅不足が、労働力の確保をさらに困難にしている。
- 求人倍率が高いのは、働き手が確保できていない証拠。
- 通年雇用には縛られないライフスタイルでニセコを楽しみたいという移住者には、一時雇用には、魅力的な側面もあるのではないかな。
- 小規模な事業が多い。共倒れのリスクが分散されている一方、労働力を町内にとどめるほどの規模がない。大企業の誘致は、ニセコ町の雰囲気には合わない。
- 小規模事業者が多いことは、ニセコ町のメリットだと前向きに捉えている。小規模事業者が頑張るのが、ニセコ町らしくて理想的なのではないかな。道の駅ビュープラザも最初は5人でスタートした。小規模でも、頑張る事業者が内発的に生まれるのは良いこと。商工会と連携してテコ入れすることも考えられる。

#### (対応のアイデア)

- 通年雇用につながるような資格は考えられないかな。
- 「夏は農業・冬はスキー」という通年雇用ができるような会社を作ってはどうか。
- 倶知安町のように大規模な商業施設があれば、女性も働くことができる通年雇用が得られるのではないかな。
- テレワークはニセコ町に馴染むかどうか。ニセコ町は空港が遠く、現在は他地域と比べて不利かも知れないが、将来は新幹線が通るので今より有利になるかも。
- 人材派遣会社・人材バンクを作り、地域全体で雇用のコントロールやマッチングをできないかな。
- 住宅のストックマネジメントも、雇用創出のポテンシャルがあるのではないかな。
- ニセコ町内の事業者は、見積りはできるが企画・提案を苦手になっている。企画・提案のスキルを身につけられるようなセミナー開催など、地域の事業者の育成というアプローチも必要ではないかな。
- 町の課題（ニーズ）が明確になれば、その課題に対応するビジネスチャンスがあるはず。町の課題を移住希望者に発信して、課題解決する事業を創業することができないかな。必要に応じて、官民連携の体制も視野に入れるべき。

### 【対応の方向性】

1. 安定した通年雇用がないことは、住宅の家賃が稼げないことにもつながり、定住促進に向けたネックになりうる。まずは、安定した雇用につながりそうなアイデアがもっと必要。
2. 併せて、地域経済分析システム（RESAS）の活用などにより、地域経済や雇用を支えている産業を明らかにすることにより、アイデア出しの一助とする。

## （2）観光

### <全般>

- 海外観光客だけでなく、国内・道内観光客についてもターゲットにすべきではないか。町内の宿泊施設は、地方創生の取組において交流人口のターゲットとすべき日本人の若者が気軽に泊まるには高すぎる。観光によって日本人の若者の交流人口の増加に貢献できていないのではないか。
- 宿泊施設も高額化しており、安く泊まりたい人向けの宿泊施設がない。倶知安駅前のビジネスホテルは、安価な宿を求めて満員になっていると聞く。ニセコ駅前にビジネスホテルがあると便利ではないか。
- 友人（子ども、若者、高齢者とも）が遊びに来たときに気軽に連れていけるような、お金のかからないスポットが少ない。
- 気軽に買えるニセコ土産が少ない。保冷が必要なものや、高価なものが多い。羊蹄山麓に広げると名物はある。
- より地域にお金を落としてもらう構造が必要。例えば、宿泊にお金がかかるからと近隣町村や車中泊に流れてしまうと、地域にお金が落ちにくくなる。
- 国内なのに外国人がサービスしているのに違和感がある。日本らしいサービスの質（ホスピタリティ）を長期的にいかに確保するかが課題。
- ICTの活用や、サイネージのデジタル化や統一化を進め、地域全体で外国人や日本人観光客に分かりやすい情報発信をすべき。
- 東京オリンピックや北海道新幹線に踊らされないような観光戦略を考えるべき。
- 夏休みのスポーツ合宿・研修、環境ツアーにもポテンシャルがあるのではないか。
- ニセコ町に来ないと得られないものを意識すべき。泉質・源泉が多種多様な温泉、地ビール・地ワイン・地酒、山菜など、まだ十分活用しきれていない観光資源がもっとあるのではないか。

### <冬のアウトドア>

- 外国人観光客を中心としたウィンタースポーツのブームはいつまで続くか。「外的要因によりブームは簡単に途切れやすいので油断できない」との意見、「特徴が似

ているエリアがある中で投資が続き、すでに一時的ブームに終わらない段階に達しておりまさに投資のチャンス」との意見の両論に分かれる。

- スキーはニセコ地域らしい特色ある取組なのに、スキー事業は軽視される傾向があり、予算もつきにくい。最近では、移住者を中心に、スキーをしない町民もいる。

#### <夏のアウトドア>

- 夏のアウトドアは、ウィンタースポーツ並みに突出した強みがあるわけではなく、ニセコ町全体としてもっと戦略的に取り組む余地がある。
- ラフティングなどの既存のメニュー以外に、ウィンタースポーツにも劣らない夏の観光メニューのさらなる充実を進めるべき。

#### <道の駅ビュープラザ>

- 施設の老朽化のタイミングに合わせて何をすべきか。食事処、特産物、公園、雨宿りなど、もっと滞在時間を延ばすような方向の工夫をすべき。
- 農産物の在庫システムが整備されているが、欠品のままになっているケースがまだ残っている。農家の代わりに集荷して道の駅ビュープラザまで運ぶようなビジネスは成り立つか。
- 駐車場が狭いが、これ以上用地は広げるのは物理的に難しい。観光バスを誘導できず、来訪者を取り逃していないか。
- 設計当初は、市街地まで足を運んで食事してもらうため、道の駅ビュープラザ内には食事処を作らなかった。実際、町内で食事をしてきている来訪者はいるのか。
- 外国人観光客にも道の駅ビュープラザに来てもらえるよう、もっと宣伝すべきではないか。

#### <有島記念館>

- 文化的施設には観光のニーズがあるはず。アートの街で売り出した市町村もある。文化的施設としてのポテンシャルをもっと生かすべきではないか。
- 周辺町村の美術館とはすでに連携しており、共通リーフレットやポスターを作り、周遊客の取り込みに取り組んでいる。
- 道の駅ビュープラザが作られてから、有島記念館への団体客の来訪者は減少傾向にある。道の駅ビュープラザからの周遊をもっと誘導できないか。
- 交通アクセスが悪い。JR・バス間の接続が悪く、ニセコ駅から徒歩で来るには遠すぎる。札幌からアーティストを呼んでイベントも行うにも、午後から行うしかない。
- 展示の案内が日本語しかなく、外国人観光客の取り逃しにつながっているのではないか。外国人観光客はごく少数。

- 町民の訪問者が少ない。

【対応の方向性】

1. 観光はニセコ町の経済を支える基盤産業。観光産業を長期的に安定・発展させることは、地域の雇用を守ることにもつながっている。
2. 国内の若者の交流人口という観点や観光資源のつながり（地域全体のストーリー性）などを意識しつつ、観光のどの部分にテコ入れすべきかを検討する。

(3) 農林業

- 農業があってこそ観光産業が成り立つ。農村風景は貴重な観光資源の一つであり、いわば、農業を介して土地の手入れをしているような側面もある。
- ニセコ町は農業に不向きな土地が多く（小規模、石が多い、水はけが悪い、山坂が多い）、新規就農には厳しい環境。誰でも新規就農ができるわけではなく、他の地域以上に初期投資やノウハウが求められるが、中には、考えが甘い新規就農希望者も見受けられる。
- 良い農地は空いてもすぐに近隣の農家が入ってしまうため、新規就農希望者が農地を見つけるのは難しい。
- ニセコ町の気候・土壌は、どんな農作物も何とか作れてしまう。逆に、ニセコならではの強みを生かした品種に特化しているわけではない。それでも道の駅ビュープラザなどで売られているのは、ニセコの名のブランドによるもの。
- 農業法人は今のところうまくいっていないが、将来的には、農地集約による規模拡大と、小規模農家による高収益作物・6次産業化への二極化が進むのではないかと。
- 「夏に農家・冬にスキー場」のように通年で働いているケースが多い。
- 夏の出面さんを指導・育成する余裕がなく、農家との親戚同士のようないきなりな付き合いが合わないというケースもあると聞く。
- 酪農は、初期投資に対応でき、事業採算性も成り立つような十分な資金がないと、融資も補助金も受けられないため、新たに始めるのは難しい。現在、町内に10件程度しか残っていない。
- 林業は、町内では行われていない。
- 大規模な成功例が少ない。
- 道の駅ビュープラザによる農作物の直販だけで生計を立てるのは困難。自ら販路を開拓するケースはあるものの多くはなく、行政のサポートも必要。
- 農作物やその加工品の海外展開までは進んでいない。

【対応の方向性】

1. 農業は二セコ町を支える基盤産業である一方、初期費用やノウハウが必要。後継者不足に悩みながらも、移住者を広く受け入れる雇用としてはハードルが高い。
2. 農家自体になるのではなく、農産物の加工品の開発・製造や販路拡大など、6次産業化による雇用創出のポテンシャルを模索していく。

## 基本目標② 地方への新しいひとの流れをつくる

### <ニセコ町の魅力>

- ずっとニセコにいると気づかないかも知れないが、ニセコ町の自然や水環境(水質)(甘露水はその象徴)は、特に都市部の移住希望者には魅力的。水道水が美味しい。
- ニセコ町への移住希望者は、都市のような便利さは求めている。
- ニセコ町に限定せず、ニセコ地域に対して魅力を感じている移住希望者が多い。

### <住宅>

#### (現状・課題)

- 住宅が足りない。家賃が田舎にしては高く、インターネットで空き家を探すのが難しい。
- ライフステージに応じた住み替え先がない。結婚・出産に伴って必要となる広い住宅が確保できず、やむなく町外に出るケースが見られる。また、共働きで所得が増えると、公営住宅は所得制限がかかる。
- 公営住宅の入居には、町民の連帯保証人が必要。移住のハードルの一つになっている。
- Uターン・Iターン、移住者の困窮度によって、必要な住宅のタイプが異なる。
- 新たに住宅を建てるための用地も乏しい。住宅を建てられる広さがあっても、上下水道が整備されていないという土地がある。今後の下水道の維持管理を考えると住宅は下水道区域内に整備すべきだが、下水道区域内に宅地がない。
- 日本人は家がなく困っている一方、外国人は別荘を建てて住んでいてうらやましい。

#### (対応のアイデア)

- 近隣町村在住でニセコ町に住みたい方の潜在需要があり、もしニセコ町に住宅があれば、データはないものの、近隣町村からの移住が見込まれる。札幌や東京からの移住がどの程度見込まれるかは未知数。移住フェアの生の声をもっと丁寧に収集すべき。
- 若者が住みやすい、家賃の安い住宅が必要。ただし、低賃金などのため定住を見込みにくいならば、入居・退去が頻繁に起こることになる。
- 空き家をもっと有効利用すべきではないか。
- 住宅が不足しているから、と今新築を作りすぎると、将来、空き家が増えてしまう。長期的なストックマネジメントや、住み替えの促進(マッチング)の方が重要。
- 民間の賃貸住宅の誘致を積極的に行うべき。ニセコに賃貸住宅を作ればすぐに満室になるはず。需要が多くあるため、家賃が下がらないおそれもあるが。

- 郊外の戸建住宅のニーズもあるが、市街地に小規模な住宅を作りコンパクトシティづくりに誘導していくことも重要。将来、高齢者になると、豪雪で住めなくなるおそれもあるが、除雪の問題がクリアできれば、高齢者になっても住みたい人はいるのではないか。
- 冬の一時雇用者は、ホテルに住むケースもあると聞く。どこに住んでいるか、実態の全体像が把握できていないのではないか。
- 土地開発公社を中心に、宅地の開発を進めていく必要がある。

#### <若者>

- UターンよりもIターンの方が母集団のスケールが大きいため、人口減少に歯止めをかけるなら、Iターンに重点化するのも一案。ただし、「ニセコ生まれ・ニセコ育ち」に、ニセコの魅力を引き継いでもらう視点も忘れてはならない。
- 若者は、買い物や気晴らしができる都市に魅力を感じている。その一方、若者向けの娯楽施設を作ると、ニセコ町の自然・環境に影響を及ぼすおそれがある。ニセコらしさを失ってはいけない。
- ニセコ町なら、海外に行かなくても、留学・ホームステイの擬似的体験ができる。
- ニセコ町には安定した雇用がないため、きちんと納税をしながら定住してくれるしっかりした若者が来にくいのではないか。
- IJターンの若者は、親の介護が始まると、ニセコを転出してしまうおそれがある。
- 新卒目線で魅力的な雇用がないため、新卒でニセコに移住するのを推進するのは難しい。ある程度資金を貯めた移住希望者に重点化すべきではないか。

#### <地域コミュニティ>

- ニセコ町に馴染んでいる移住者も多くいるが、中には、しがらみがなく意見やライフスタイルが自由すぎる移住者も見受けられる。最近、町内会に入らない移住者も増えてきた。

#### <高齢者>

- 医療・介護などの政策に強みがあるわけでもなく、豪雪・寒冷地域のため、車運転できなくなった高齢者が暮らすには、地域特性の面から不向き。対応できなくなった高齢者は町外に出て行ってしまう。

#### <移住施策>

- 「ちょっと暮らし」は観光施設で行っており、実際に住み始めた後に生じるギャップを埋めきれていないのではないか。
- 「ちょっと暮らし」の利用者の実績は60代以上ばかりで、若者はほほいない。

- 住宅の確保がネックになっているならば、移住フェアなどによる広報は、取組の優先度としては低いのではないか。

#### <学校>

- ニセコ町内には普通化の高校も大学もないため、高校進学タイミングで町外の高校に出る子どもが多い。昔は倶知安高校（普通科）への進学が多かったが、最近、小樽や札幌に行くケースも見られる。若いうちに町外を経験するのは決して悪いことではない。
- ニセコ高校の生徒数は減少傾向にあり、ニセコ町内に就職する生徒はほとんどいなくなっている。ニセコ町内の担い手育成の観点など、ニセコ高校がニセコ町にどう貢献しているのか、町立高校としての特色や位置づけを改めて精査するタイムリミットにある。
- ニセコ高校に限らず、ニセコ町をフィールドにした起業スクールや観光経営など、ニセコ町でしか学べないことを売りにできないか。
- ニセコ町スタイルの子育てとして小中高一貫の観点を持つべき。例えば、英語ができる子の教育が考えられる。
- 交通手段がなく、通学が大変。
- 学習塾がない。
- 大学のキャンパス、研究所などを作ってはどうか。
- ニセコ町にいるのだから、日常英会話ができるくらいの子どもになってほしい。

#### <転出理由>

- ニセコ町は国民健康保険税が高いから、と札幌に転出した夫婦がいた。

#### 【対応の方向性】

1. 移住希望者の取りこぼし（ニセコ町に住みたいのに住めない人）が見られる。取りこぼしを防ぐには、住宅の確保が最大のネックで、長期的・戦略的なストックマネジメントが求められる。若者の受け皿の確保やミスマッチの防止、高齢者に優しい住宅の確保など、個別ニーズに対応した検討を進めていく。
2. 移住のPRは、将来ニセコ町を担うような若者により興味を持ってもらうよう、情報発信の内容・方法を工夫していく。
3. 学校は、Uターンを見込む以外に、ニセコらしい教育内容や子育て環境という観点から、移住者にアピールすることも考えられる。

### 基本目標③ 若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる

#### <子育て環境>

- 幼児センターや学童保育所が新しく、子育て環境は良いが、ここ数年は、子どもが増加傾向であり、幼児センター、学童保育所、学校などの教育施設において教室不足が予想される。町外の幼稚園に通うケースも見られる。潜在的な待機児童の存在も留意すべき。
- ニセコ町は小さい子が気軽に遊べる場所が少ない。冬は町民センターか体育館で遊んでいるケースが見られるが、小学生の子どもを預けられるようなところや、清潔で安全な水遊び場のような子どもの居場所を、さらに充実してほしい。また、昔は幼児センター裏で遊ばせられたが、今は通り抜けができないし、草刈りの頻度が少なくなったため、小さい子供は近寄せられない。整備してフットパスとして活用すれば、小さい子供だけでなく高齢者も楽しめるのではないか。
- ママ友同士で子どもを預け合うなど、地域コミュニティ全体で子育てしやすい雰囲気が見られるが、地域コミュニティとの付き合いによっては頼る人が見つかりにくいケースも見られる。
- ベビーシッターは、怪我や事故などのトラブルのおそれもあるので、公共の受け皿をもっと作るべき。
- ニセコ町の合計特殊出生率は、平成 19 年度を境に上昇傾向にある。原因を見出せばヒントになるのではないか。
- 町外の高校への通学が大変。(JR に合わせた登下校)
- 紙おむつやミルクなど、休日は倶知安町まで行かないと入手しにくいものもある。
- 幼児期の支援ばかりに着目するのではなく、大学進学時の支援も考えるべきではないか。高校から札幌の大学へ進学したとき(学費+生活費)の費用負担が一番大きかった。札幌は通学できる距離でもないため、家賃もかかる。
- 若い母親との懇親会の中で、子どもの食の安心・安全に関する興味は高いものの、お菓子の食べさせすぎなど、子どもの食の管理ができていない印象を受けた。役場の栄養士の職員と協力して、親に対する食育教室を行うことも考えられる。町外の幼稚園へ通園させている母親など、母親との懇談会により情報を収集していくべき。
- 最近、ニセコに縁もゆかりもない人が、離婚して子どもを連れて移住するケースが増えている。独自のネットワークで、ニセコは子育てしやすいという評判が回っているのかも知れない。子連れ・大家族でやってくる転入者も増えているように感じている。

#### <病院>

- 医療施設(小児科や産婦人科)が充実していないが、車があれば倶知安町や札幌に

アクセス可能。産婦人科については里帰りも考えられる。

- 保育所に看護師を常駐させてはどうか。
- 子どもは症状を訴えられないが、医療機関と相談ができるだけでも少しは安心できる。

#### <出会い・結婚>

- 職場かアウトドア系のネットワークなどで出会っているようだが、チャンスは少ないかも知れない。
- 最近では、独身ではなく、若い夫婦として子連れで移住しているケースが目立つ。

#### <ワークライフバランス>

- 雇用が不安定・低収入で、子どもの教育費を稼ぐことが容易ではない。
- 子育てしながらできる仕事は限られており、女性は、倶知安町のスーパーマーケットやスキー場など町外に出て働いている。
- ハローワークは条件が固まりすぎており、知人・友人のツテの方が仕事が見つかりやすい。
- 父親の育児参加は増加傾向にある。
- 特に女性の正社員の雇用が少なく、やりたいことができない。

#### 【対応の方向性】

1. 特にここ数年は、子どもの受け入れ先の確保は必須。取りこぼして町外に移住してしまわないように体制整備を進めていく。
2. 病院、買い物などは、広域的に確保できているとも考えられるが、まずはニーズを丁寧に把握していく。

**基本目標④** 時代に合った地域をつくり、安心な暮らしを守るとともに、地域と地域を連携する

<交通アクセス>

- 札幌までのアクセスが悪いが、道内全体では比較的良好な方（車で約2時間でドライブにピッタリ、JR 在来線でもアクセス可能）
- 北海道新幹線の開通（2030（平成 42）年札幌延伸）に伴い、札幌・函館への交通アクセスが革新的に向上する。ニセコは、札幌・函館の中継点に位置しており、倶知安駅を踏まえた地域全体のまちづくりの方向性を検討すべき。
- 人口ビジョンでも、北海道新幹線開通を踏まえた人口推計などを行うべき。札幌圏のベッドタウンになることも考えられる。
- 倶知安駅までのアクセスを、今のうちにもっと向上しておくべき。
- 北海道新幹線の札幌延伸に伴い、JR 在来線が廃線になるおそれがある。大人は車があるから影響は小さいかも知れないが、子どもや高齢者には影響が大きい。鉄道マニア向けの観光資源としても魅力的なはず。
- デマンドバスの予約が取りにくく、ニセコ町外は対象外なのが不便。観光（地域にお金を落としてもらおう拠点を結ぶ）を含めた周遊バスは考えられるか。役場だけで予算を確保するのではなく、周遊先から負担金を集める仕組みも一案。
- そもそも、人の動きは、町村の境界と関係ないし一致もしない。
- 医療・買い物は、札幌や小樽でも大規模店まで 20~30 分かかる。同じように気軽に倶知安町や蘭越町に行ければ、ニセコ町も快適に居住できることになる。今はバスの本数が少なく、JR とバスのタイミングが揃っていて不便。

<病院>

- 交通アクセスが不便で、医療体制についても脆弱。自家用車の運転が難しくなると住み続けることが難しくなる傾向がある。日常生活でも除雪が大変であるなど高齢者にとっては厳しい環境。

<広域的な観点>

- 外から見たら、倶知安町や蘭越町なども含めた地域全体で「ニセコ」。
- ニセコ町内にないもの（病院、大きなスーパーマーケットなど）も、広域で見れば確保できていることになるのではないか。
- ニセコ町内で買い物を済ます観点からは、コンビニの品揃えは良くなっているが、ちょっとした買い物ができるお店は減った。日曜の買い物も不便に感じている。
- 近所に大きなスーパーマーケットがなくても、買い物は通販でできてしまう。先を読んでまとめて購入すれば送料無料になり、実は買い物に困ることは少ない。ただ

し、地方創生の観点から、町外への資金流出が増えることになるので良くない。

- 近隣町村には、ニセコ町の改名のときのわだかまりが今も残っているのではないか。

#### <インフラ>

- 上下水道が未普及の郊外に住宅を建てたいニーズがあるものの、費用対効果や長期的なストックマネジメントを考慮すると、対応は難しい。
- 上下水道のストックマネジメントは、ニセコの水環境を守るという大事な役割がある。計画的に点検を行い、老朽化の著しいものを優先的に補修していくべき。

#### <地域の雰囲気・暮らしやすさ>

- 近所との関係が希薄になって暮らしにくくなっているケースも考えられる。
- 高齢になるとニセコ町を離れてしまう結果、高齢者数が3割程度に保たれている。高齢者に冷たくなならないよう表現に配慮が必要だが、バランスとしてちょうど良いかも知れない。
- 雪だけは対応が大変だが、雪以外は、高齢者も意外と暮らしやすいのではないか。

#### 【対応の方向性】

1. 地域の魅力をより生かすには、ニセコ地域として考え、広域的な取組を進めることについても重要。
2. 倶知安駅（及び必要に応じてその他周辺自治体）間のアクセス向上（通院、買い物、観光など）
3. 北海道新幹線の札幌延伸に伴うメリット・デメリットの深堀り

## その他

### (1) 環境モデル都市

- 人口増加に伴い環境負荷が増えるなど、地方創生の取組が環境政策と両立するとは限らないが、環境の取組が利益向上や雇用につながるケースも考えられるはず。
- 省エネ・再エネにより電力やガソリンの消費量を削減し、町外への資金流出を減らしていることの効果が分かりにくい。民間が波及効果（最終的には自身のメリットにつながる）を理解することが重要。
- 「環境モデル都市」であることで、町民には何かメリットがあるのか。

#### 【対応の方向性】

省エネ・創エネは、地域外への資金流出を減らして地域内の資金循環に回すことができる点で、地方創生の趣旨に沿った取組だが、趣旨が分かりにくい。「地域内の資金循環」という概念について、町民に分かりやすい説明が必要（KPI 設定など）。